

- 日 時：2019年1月6日（日）
- 場 所：立川教会新年礼拝
- 説教題：「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」
- 聖 書：旧約 ヨシュア記 3：1－17（旧 p342）  
新約 ルカによる福音書 3：15－22（p106）
- 讃美歌：6「つくりぬしを賛美します」505「歩ませてください」

明けましておめでとうございます。

本年も宜しくお願い致します。

昨日は、私がこの教会に赴任して初めて食事の準備をしました。

今日のお昼のお雑煮の準備でしたが、金曜日に N さんから連絡があり、前日、昨日ですが準備に行くので、手伝って欲しいとのことでした。私も気になっていて、中川さんに連絡しようと思っていたところでした。

ところが、ちょうど金曜日の朝の事です。

料理教室の M 先生からメールが来て、夕食に招待されました。

突然のメールでしたが、幸いに夜は空いていたので、行くことが出来ました。

すると、食事の話題の中で、今日のお雑煮の話が出て、男性が準備することなどを語っていると、M 先生の夫の S さんが、とても美味しいお雑煮を作ることが分かりました。

その場で即決です。

すぐに、土曜日に教会に来てもらい、N さんと私と一緒に作る事になったのです。

しかも、お餅以外の主だった材料は、全て購入して下さる事になりました。

そして午後 1 時集合し、午後 3 時には完成です。

出来栄は・・・。

素晴らしい味です。

本当に美味しいのです。

N さんが感心していたので間違いありません。

楽しみにしていて下さい。

さて、本題に入ります。

2018 年が過ぎ去り、2019 年がやって来ました。

1 日 24 時間、2019 年も、朝に太陽は昇り、夕べに沈むことは同じです。

それにもかかわらず、私たちが生活しているこの地球が 1 回転する時間を 1 日、太陽の周りを 1 周する時間を 1 年として区切りを付けています。

そして、その 1 年の積み重ねを歴史として覚えるのです。

この“時”の経過は、私たちの肉体にも変化を及ぼします。

人間も他の動物も、生れ出で、時の経過と共に成長し、成人となり、老いて行きます。

それは自然の摂理とも呼びますが、ただ人間には他の動物には無い力が与えられています。私たちはそれを霊性と呼んでいます。人間の命は自然に生まれたものではなく、私たちは創造主によって命を与えられた被造物であることを知る霊性です。

その事を記したのが、クリスマスの夜の讃美礼拝でお話しした、ヨハネによる福音書第 1 章 1 節から 5 節の言葉です。お読みします。新共同訳聖書 163 頁、上の段です。

1：初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

2：この言は、初めに神と共にあった。

3：万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

4：言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。

5：光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

この言は、単に話し言葉と言う意味ではなく、ギリシャ語のロゴス、即ち真実なるお方、主イエス・キリストを指し示しています。そして、私たち命ある者全てに備わっている霊性とは、創造主である神を知る力です。

イエス様は、神様によって世に遣わされる以前から神様と共にありました。

神様による天地創造の業においても、イエス様は神様と共にあり、それはイエス様の業でもありました。

そして、神様の御子として世に生れ出で、私たちの罪の暗闇を照らす光として、その使命を与えられました。しかし私たち人間は、神様から世に遣わされたイエス様を理解することが出来ずに、十字架に架けて殺したのです。

私は、昨年の 1 年の歩みを思い返す時に、神の国とは何かについて考えるようになりました。イエス様は、聖書の中で、神の国について何度も人々に語っています。その全てが譬えで語られているのですが、その中でも、私にとって、神の国はあなたがたのただ中にあるのだとの言葉が特に心に留まりました。

ルカによる福音書第 17 章 20 節 21 節です。新共同訳聖書の 143 頁、上の段です。

20：ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。

21：『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

「あなたがたの間にある」とは、私と他の人との関わりの中にあることです。私と隣り人、私と貴方との関わりの中に神の国は存在すると言うのです。

これは、一体どのようなことを意味するのでしょうか。

私と貴方との関わりの中に神の国はすでにある。

先週の N さんの奨励の題は、二人又は三人、私の名によって集まる所には私もいるとの聖書箇所から取られています。二人又は三人、イエス様の名によって集まる時、私もそこにいる。それは、神の国の先取りとも言えます。

ヘブライ語の挨拶であるシャロームにしても、中国語の挨拶である平安にしても、それは、お互いに平安あれ、安らかであれと言う意味です。お互いに平安でありなさい、お互いに安らかでありなさい、キリストに在って、と言う意味です。

この時、私の心に、イエス様が語られた山上の説教の中の一節が響いて来ます。

マタイによる福音書第 5 章 9 節、新共同訳聖書 16 頁です。

9：平和を実現する人々は、幸いである。

その人たちは神の子と呼ばれる。

平和を実現する、新共同訳より前の聖書では、実現するは造り出すと訳されています。平和を造り出す者は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれると言うのです。

神様の子です。

子とは、親が負っている務めを引き継ぐ存在です。

つまり、神の子とは、神様がこの地に成そうとしている御業を受け継ぐ者です。

神様がこの地に成そうとしている御業とは何でしょうか。

それが平和です。

平和とは単に争いが無いだけではありません。

平和には、もっと豊かな意味があります。

木田献一・和田幹男監修の『聖書辞典』（キリスト新聞社、1998）に記されている平和の項を参考にしながら述べますが、確かに旧約の時代では、平和とは単に戦争が無いことを意味していました。しかし、ヘブライ語のシャロームは、戦争が無いだけでなく、繁栄や平安をも意味しています。

平和、それは心の安らぎであり、心の豊かさであり、他者を思いやる心であり、何よりも、神様からの恵みを受け、神様に感謝する心でもあるのです。

真の平和の源は神様にあり、それは神様との契約に結びついています。

真の平和は、悪い思いの時は、持つ事が出来ません。真の平和を得るには、神様の義に生きる事が必要だからです。神様を畏れ、神様の義しさの中に生きる時、初めて真の平和が私の心に与えられるのです。

又一方、イエス様が来られた後の時代では、平和とは、福音、即ち良き訪れをも意味しました。この平和は神様との平和であり、イエス様の十字架の血によって与えられたのです。イエス様は十字架によって私たちの平和となり、神様との間で和らぎを得て下さったのです。私たちは、その平和を生きるだけで満足してはなりません。その平和を世に知らせ、実現するために神様に招かれているからです。

神の国とは、平和が実現されている国です。

その平和を私と貴方の間に造り出し、世に造り出す存在、それが、主イエス・キリストを神の子と信じ、告白する私たちです。私と貴方の間に、そして世に平和を実現する者、それが私たちなのです。

2019年の新しい年を迎えて、私たちは神の国の奥義を知らされた今、神の国を先取りして生きる者となろうではありませんか。

今日の説教題は、イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、神様が言われた言葉です。

「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」

この1年、立川教会に招かれた私たちは、イエス様の後に従い、私と貴方の間に、そしてこの世に平和を造り出す者となろうではありませんか。

立川教会に呼び集められた私たちは、まず教会の交わりの中に、そして教会より出で、私たちが生活するどこにあっても、平和を造り出す存在になりたいと思うのです。

祈りましょう。

